

# 交差保育法の実践（その一）



宮沢キヨ子・大塚朝子  
佐藤佳代子・相楽幸子  
指導 大戸 美也子

「交差保育法、こう呼ぶのにふさわしい教育（保育）の方法が保育界で開発され展開していくようにしたい」という呼びかけが、日本保育学会会報（昭和四十三年五月）を通して報じられたのは、四年前のことである。提唱者である松村康平氏は、交差保育法という呼び名は新しく、内容も一般的にゆきわたっていなくても、この保育方法と関連の深い保育はどの国でも実施されている事実を、次のように指摘している。

「集団内の個人に焦点をあてて、個人ひとりひとりを単位としてとらえ個人相互の関係を生かす保育がすすめられている場合」「集団内活動に視点を移して、いくつかの下位集団を領域としてとらえ、下位集団相互の関係を生かす保育が進められている場合」「組分けがどの組にとつても意義あるものとなるよ

うに、組相互の関係を生かす保育が進められている場合」あるいは「園と園とが、連絡をとりあって保育をすすめ連絡保育から、『交換保育』に発展していく場合」これらはすべて交差保育法が実践されることになる、というのである。交差保育法は、交差活動の発展をもたらす「単位」（領域）をどのように規定し、どのような単位と交差させるかによって、そのレベルも発展の条件も異なってくるが、交差する領域相互が対等に関係しあい、領域相互の「差」が関係の発展に寄与するものととらえる保育の方法である。

交差保育法の応用範囲は広い。私どもの保育実践を高める研究会では、昨年の五月より交差保育法について考え、話し合い、いくつかの実践をかさねてきた。すなわち、クラス内での子ども

もの動き、小グループの動きを、交差の観点からとらえること、またクラス相互が連絡しあい、二クラス、三クラスが出合って共通の活動を展開できる幼稚園では、共通領域を発展させる教師のチーム・ワークのあり方が研究され実践されてきた。そして、秋には、研究会のメンバーが連絡をとりあって、園相互の交差保育を実現することになったようである。その実現までのプロセスを経過を追つてこれから紹介してみよう

### 一 交差保育実現まで

**背景** 郡山市は、昭和四十二年、近隣の町村を合併して、新産都市に指定された東北の中都市である。交差保育に参加したザベリオ幼稚園は、旧市内の中心部にある三十余年の歴史をもつ

カソリック系の幼稚園である。この園児は、旧市内の商店街の子どもを中心に市内の各方部から集まっている。もう一つの富田幼稚園は、旧市内と新市内の境界地に位置し、なだらかな丘陵と平地が交差する林の中にある近郊の幼稚園である。この辺は、バスに二十分ものれば市街地に行けるので、近年、丘陵部に団地ができたり、林が切断されて宅地として造成されている。しかし、平地では米作が行なわれており、市内とはいえないどかな田園風景がのぞまれる。したがって、この園児は、

園は、市街地にあるため、園庭は平たんであり自然が豊かといふわけにはいかない。一方、富田幼稚園は、園自体が丘陵の斜面を活用して建てられているため、園庭全体がなだらかな斜面をなし、斜面には背の低い松がいくつかたまりをつくつて植えこまれ固定遊具がその中に点在している。太い道、細い道、急な坂、なだらかな坂、そして日なたのところも、子どもたちが“緑のトンネル”と呼んでいる日かけの坂道もある。そしてまた、園庭のうらにはぶなや松の繁つている林がある。林を通りぬけるとあだたら山の全貌が眼前に広がり、山のすそ野まで田んぼがつづく。そして、田んぼの中に磐越東線の線路も走っている。

秋になると林に囲まれた富田幼稚園はさながら黄金の海に浮かぶ緑の島のようになる。そして、この林の中には、子どもたちが毎日毎日拾つても尽きぬほど、豊富に松ぼっくりやどんぐりの実が落ちてくる。林は無尽蔵の教材庫となるのである。こんな話を、市街地の先生が聞いて、子どもと共に一日をこの林の中で過ごしたくなるのは当然のことだろう。

十月上旬、研究会で顔を合わせる先生方の間で、市街地から郊外の幼稚園訪問の計画が練られ始めた。

## 実現への打診

十月八日（金）各園とも、研究会のメンバーを通して交差保育の実践について園長との交渉が始まる。富田幼稚園では園長はじめ、全職員が計画に賛同し園全体で受け入れることになる。

一方、ザベリオ幼稚園では、交差保育のねらい、具体的に実践するときの方法について、同じく研究会のメンバーと主事との間で話し合われる。しかし、全園で交換するにはあまりに大所帯になること、一クラスが代表して交換する場合、クラスの選択方法や他のクラスの子ども父兄に対する配慮をどうするか等、主事から指摘があり初めての試みでもあるので園長と相談の上、実施の如何が決定されることになる。

十月十日（日）富田幼稚園、たんぽ組の担任（佐藤先生）はザベリオ幼稚園きく組、大塚朝子先生へ手紙を書く。

十月十六日（土）ザベリオ幼稚園園長より交差保育実践の許可がおりる。職員会議の席上で交差保育とその実践方法について大塚先生から全体に説明される。今回はきく組が代表で交換し、他のクラスの交換がさらに進められるようきっかけの役割を果たすことが話される。★2

十月十八日（月）富田・ザベリオ幼稚園双方が交差保育の実

践を了解したところで、富田幼稚園の佐藤先生の手紙が投函される。

## 手紙の交換

十月二十日（水）佐藤先生の手紙がザベリオ幼稚園の大塚先生あてに届く。

### ◆ 手紙の内容

「とてもよいおてんきのひに、ようちえんのおともだちみんなで、やまへいきました。やまにいくと、ちょうどとつきゅうのとおるのがみました。たんぽのあぜみちのくさにすわって、おべんとうをたべるとえんそくにきたみたいです。きいろになつたたんぽのなかをどんどんあるいていくとどんぐりやまつぼつくりのたくさんおちているはやしにきます。そうそう、とみたようちえんのおにわにも、どんぐりのきがあるのよ。このあいだ、おとこのこが そのきにのぼつて えだとえだのあいだにあしがはさまって なかなかぬけない ということがありました。ときどきそういうことがあるので、みんなはそのきを『まほうのき』とよんでいます。とみたようちえんは、ちいさなおやまのうえにあります。おつかせんせい いちどきくぐみのおともだちとあそびにきませんか』（この手紙には『まほうの木』のさし絵もはい

つている。)

十月二十一日（木）ザベリオ幼稚園の大塚先生は、昨日きた佐藤先生の手紙を、子どもたちのどのような状態のときに入れるとかを考えて、次のような保育を展開する。

（庭に落ちている木の葉を拾ってきて、へやを飾ったり、へやにまいて遊びながら秋の自然を子どもに感じてもらいたい。子どもたちが自発的に秋の自然について語りだしたとき、他の幼稚園のようすを知らせ、その幼稚園へ行つてみたいという気持が起こってきたらよいと思う。）

八時半 ビンセン、鉛筆を準備しておく。

九時 外でお集り、お祈り、朝のあいさつ、庭には大きなかえでの葉がたくさんおちている。

先生 「こんなきれいな木の葉が落ちている。一まい、二まい三まい」

先生 「こんなに拾っちゃった」

子どもたちもまわりの木の葉に気づき一しょにひろい始める。「先生、こんな青い葉っぱが落ちてるよ」「わたしきいろいろ葉っぱだけひろつちゃった」子どもたちは口々にそいいながら次々葉っぱを集めしていく。

先生「あら、たくさんあつめたわね。みんなのきれいな葉っぱで何ができるかしらね。じゃあ、おへやはいって葉っぱで出でこ

あそびましようか」

へやにはいると、子どもたちは床の上に葉っぱを並べたり數えたり、セロテープを使って飛行機や人形の着物などの製作を始める。子どもたちの活動がだんだん終りに近づいてきたころ、（一時間近く子どもは思い思に葉っぱを使つてあそんだ）佐藤先生からの手紙をとり出して

先生「きょう、先生にこんな手紙がとどきました」子どもたちは活動の手を止めて、ハッとして先生の顔を見る。

先生「さあ、封筒の名前を見てみましょうか、これはね、さうかよこ先生なの。富田幼稚園のたんぱく組の先生なの、どんなお手紙か読んでみましょうか」ゆっくりと、子どもたちに話しかけるように読む、興味をさそうのような個所はくりかえし読む。

子どもたちは、好奇心をもつてひとりひとり静かに聞いていく。「まほうの木」「山の上の幼稚園」「特急が通る」という箇所で「へえー」「へえー」と反応し、「ほんとうに、まほうの木があるのかなあ」「どんぐりがたくさんおちているの」と驚いた表情で聞きかえす。子どもたちは、本当にそんな幼稚園があるのかなあ、行つてみたいなあ、という気持はあるようだが、「幼稚園に行こう」「木の実を拾いに行こう」という実行のことばは出てこ

ない、そこで、子どもたちの気持を引き立てるつもりで

先生「みんなこんなお山の上の幼稚園へ行つてみたいなあつて思わない?」

子ども「うん、行きたい」「先生行こうよ」「行こう！ 行こう」  
先生「行つたら、富田のおともだちとどんなことができるかしら？」

子ども どんぐりたくさんひろうの

先生 今ごろ 富田のおともたちは何しているかしら？ みんなの気持を伝えるにはどうしたらいいかしら？」

子ども  
手組かくの

先生「そうね、いい考えね。じゃあ、手紙書きたいおともだちは、ビンセンと鉛筆あげましょう」

全員が、便箋と鉛筆をもらつて書き始める。かよこせんせい

おげんきですか」と書き始める子どもが多い。日々に「さとうかよこせんせいだよね」と確認しているので、黒板に「さとうかよこせんせい、とみたようちゃん、たんぽぽぐみ」と書いておく。字のわからないときは、先生が書いてあげることを話しておこうが、友だち同志で教え合っている。あいさつのところまでは書いたが、その先の言葉がでてこないようす。

先生「みんなどんごとしてあそんでいるか、しらせてあげ

たら?」と、話しかけると、幼稚園での生活のこと、気づいたことを書き始める。十一時半より毎週おこなわれている英語の時間が始まるため、どんなことを手紙に書くか、ひとりひとり内容をたしかめ、また明日その続きをすることにして片付けを始める。

十月二十二日（金）（子どもたちの手紙にたいする反応がわかつたので、富田幼稚園へ期待していること、考えていることが何らかの形であらわすことができるよう、ひとりひとりの考えを認めてその先をのばすようにしたい。）

朝、子どもの方から「手紙のつづきかきたい」と意欲的にいい始めたので、すぐ昨日の続きをとりかかる。子どもたちは、書きたいことを一言一言友だちに話しながらエンピツを動かして いる。

「早くいきたい」「どんぐりをひろいたい」「〇〇日にいきたい」  
「けんかはしないですか」「どんぐりがすくなくて、とり  
っこします」等々と書いている、もう書き終えた子に「もう  
を書いてあげたら、もつときれいな手紙ができるんじゃない  
と助言する。『まくらみ』という文字のまわりをもよおで飾り、  
印象的にしたり、好きな絵を描いたり、幼稚園で遊んでいると  
うすを描く。

できあがつた手紙は、大きな封筒に順々に入れていき、佐藤先生に渡すことを話す。

十月二十四日（日）佐藤・大塚先生が出合い、きく組の子どもたちがどんなようすで手紙を受けとめたか話す。きく組からのお便りと、ザベリオ学園のバザーで売られたビスケットが富田幼稚園の佐藤先生に手渡される。

十月二十五日（月）（たんぽば組の子どもたちに、どんな引きさつでザベリオのお友だちから手紙がとどいたかを知らせるとき、町から訪ねてくる子どもたちの喜びや期待と同じくらい強い期待を育てるにはどうすればよいかを考え、裏山へ行ってビスケットを食べながら大塚先生の手紙を読むことにする）

九時半 キリン紙、鉛筆を用意しておく、

表する。お父さんの車にのってお母さんとお姉さんと三人で歯医者に行つたこと。お兄ちゃんと家で積木や粘土をしてあそんだこと。おじいさんの家にあそびに行つたこと。ドライブに行つたこと等が話される。

先生「他にいませんか？」

じゃあ、先生もきのうのことみんなにお話しします。きのう、先生はお友だちにあいました。そのお友だちの名前はザベリオ

幼稚園の先生なのよ、大塚朝子先生といいます。どうして大塚先生に会つたかというとね、先生が大塚先生にお手紙書いたからなの。ほら、いつかとつてもお天気のいい日に、すみれさんもれんげさんも、たんぽさんも一緒に山へ行つたでしょう？ そして、特急電車や貨物列車を見てお弁当食べたでしょう。あのときのこと、とっても楽ししかつたから手紙にして出したのよ。そうしたらね、大塚先生から電話がかかってきたの『ザベリオのきく組のおともだちがたんぽばさんに手紙を書きましたから、とりにきてください』って。ザベリオのおともだちは、富田幼稚園へあそびに来て、どんぐりや木の実を拾いたいんですって

子どもたちは、始めて聞く先生の名前だつたり、事件なのでポカんとしてきいている。ザベリオという名を聞いて「町の幼稚園だね」「近くの〇〇君がいつてたよ」等と話す。

先生「ねえ、どんぐり、どこにたくさん落ちているかしら？」  
どんなところにどんぐりが落ちているか見に行きましょう」  
(どんぐり拾いに行くというので、子どもたちの顔がぱッと明るくなる)

先生「それからビスケットもいただいてきたの。少しづつだけ食べながら朝子先生からのお手紙よみましよう」ビスケット、と聞いただけでますますうれしそうに立ちあがつて外にと

び出す。先生は手紙とビスケット、それにビニールの袋を持つて裏山へ向かう。

## 解説

園と園との連絡がどれ、交差保育の第一歩がふみ出されたところである。これまでの経過でよく吟味したいことは、第一にそれぞれの幼稚園で交差保育の位置づけをはつきりさせること、第二に交差活動の単位の規模と、それに規定される発展の条件をとらえること、(役割期待)そして第三に、連絡の媒介物の生かし方を意識的にとらえることの三点である。第一については園長の協力を得て、全職員で話し合うことが大切である。結果的には特定のクラスが代表して交換することがあつても、活動を共有できる状況があつてはじめて園と園との交差保育なのである、ということが認識され実践される。第二について今回は、一方の園が六クラス二百余名(他方の園は三クラス七十名)の★<sup>1</sup>大規模な園であるため、園を代表する一クラスと全園との交換という形となつた。したがつて、きく、たんぽば組共に、交差活動をになう一方の単位としてふるまう役割の他に、二つの園をつなぐ役割(接続的役割)が同時に期待されていた。園相互の関係が同時にすすめられる場合、またクラスのみの相互関係が

展開される場合には、それぞれに期待のない方が異なることに注意する必要がある。第三の課題について今回は、手紙が有効に生かされ、製作等の物の交換への布石が上手にひかれていったと思われる。(郡山女子大学、ザベリオ幼稚園、富田幼稚園)

## ——日本保育学会第二十五回大会のお知らせ——

一、大会期日 昭和四十七年五月十三日(土)十四日(日)  
二、大会会場 大阪樟蔭女子大学(近畿日本鉄道奈良線、小阪駅下車、徒歩約三分)

三、おもな計画案

1、創立二十五周年記念講演会

2、個別研究発表

3、シンポジウム

4、中教審および中児審の答申をめぐって

5、正会員

6、臨時会員

(正会員でない方)

7、学生

8、日本保育学会の正会員でない方も、臨時会員としてご参

加いただけます。

第一日 第二日

保育の制度を中心として  
保育の内容と方法を中心として

4、資料展示会 テーマ「世界の児童保育」

5、大会参加費

正会員 七百円 大会当日、受付へ  
臨時会員 七百円 ご持参願います。  
二百円

東大阪市菱屋西二五八  
大阪樟蔭女子大学児童学研究室内  
電話(06) 七三三一八一八一  
日本保育学会第二十五回大会運営委員会